

『三河物語』の文体

—— 文語体と口語体 ——

宇都宮陸男
(日本文化選修)

はじめに

「文体」とは何か。『国語学辞典』(国語学会編・昭30・8)の「文体」の項によると、次のようにある。

文章は同じような内容を持つものでも、その記載形式・語彙・語法・修辭などの差によって、いろいろ違った印象を読者に与える。その印象の差によって文章表現を幾つかの型に分けた時、それぞれの型を文体と呼ぶ。型に分ける基準は一定ではないから、いろいろな面から文体を設定することができるが、その主なものは、(i)記載形式から、漢文体・宣命体・東鑑体など。(ii)語彙・語法から、候文体・和文体・漢文直訳体・文語体・口語体など。(iii)修辭上から、散文体・韻文体・四六駢儷体などが普通に言われる。(817頁)

本稿で三河物語の文体を考える場合には、主として右の(ii)語彙・語法から、候文体・和文体・漢文直訳体・文語体・口語体などの観点によることとする。

三河物語の文体に関することとしては、既に『三河物語・葉隠』(日本思想体系26)の解説において、大塚光信氏は次のように述べてい

られる。

以上要するに、三河物語は、i 当時の文を綴る際の基準であった文語にのっとって書こうとされているといつてよい。しかしながら、それにもかかわらず、ii (i) 表記面では、片仮名・平仮名混用と難漢字使用および三点濁点がほぼ正確に全巻にほどこされているという点で特異性を見せるとともに、口頭語の実態を文字面に写しているところもかなりある。(ii) 語法面では、口語化形をあちらこちらに混在させているの二点に特徴があり、そこに興味がそそられるのである。(655~656頁)

と述べていられる。そして、氏は、語法上の特色として、注目すべきことがらを箇条的にあげていられる(653~654頁)。

(a) 単独の文の主格助詞としてガがあらわれるか。(b) 文の終止に用いられるのは連体形か。(c) コソに対する活用語の結びは已然形以外の形か。(d) 一・二段用語のベシ・マジへの接続が未然形か終止形か。(e) タリ・ナリの連体形の形に変化が見られるか。(f) 助動詞ダの存在。(g) 二段活用が一般化しているか。(h) 八行四段動詞の音便形。(i) 形容詞連用形の音便形

これらは、口語化形を示すもの(a)~(e)と東国語の例とされる

もの(f) (i)とであつて、該当例を二―三例ずつあげていられる。しかし、氏も「勿論この形が多数を占めるわけではないから、基調をなす文語のなかに僅かに口語化形が露呈していると見なすべきである。」(654頁)とことわつていられるように、右の各項に該当する用例を全てあげられたわけではない。又、これは語法上の特色について述べられたものであつて、文体についての言及ではない。

そこで本稿では、語法上、特色のあるものをいくつかとりあげて、その用例を全て調査するとともに、場合によっては、口語化形以外のもの(文語形)も調査して、その比率も調べてみる。又、三河物語の文体という場合、大きくは文語体と口語体との要素が混在しているわけであるから、文語体については、更に漢文訓読体、変体漢文体、和文体などの要素に分けて考えてみることにする。まだ調査の途中であつて、全ての調査を終つていられるわけではなく、本稿はその中間報告という形である。

一、原因・理由を表わす条件句

この「原因・理由を表わす条件句」というのは、小林千草氏「中世口語における原因・理由を表わす条件句」(『国語学』94、昭48・9)における「必然確定条件句を構成する」という意味合いのものであるが、「已然形+バ」の場合は「偶然確定条件句」を除いたものということになる。

三河物語にみられる条件句の種類・用例数・使用率・会話・地の文での別を示すと、「表一」のようになる。

これによると、三河物語にみられる条件句の種類は、用例の多い順に並べると、「バ・アイダ・ユエ・ヲモツテ・ホドニ・ニヨツテ・ニ」となる。このうち、漢文訓読体に用いられる条件句は(四)「ヲモツ

〔表一〕三河物語における原因・理由を表す条件句

条件句	用例数	使用率(%)	会話文	地の文
(一)バ	579	77.6	134 (23.1)	445 (76.9)
(二)アイダ	77	10.3	49 (63.6)	28 (36.4)
(三)ユエ	43	5.8	16 (37.2)	27 (62.8)
(四)ヲモツテ	19	2.5	8 (42.1)	11 (57.9)
(五)ホドニ	15	2.0	3 (20.0)	12 (80.0)
(六)ニヨツテ	12	1.6	2 (16.7)	10 (83.3)
(七)ニ	1	0.1	0 (-)	1 (100.0)
合計	746	99.9	212 (28.4)	534 (71.6)

でも、等しく文語体の用語である点で一致している。(四)(七)は平安時代以来用いられており、(五)は鎌倉時代以来用いられている。又、これらが文語体の用語であることは、先の小林論文からも明らかである。これに対して、「ニヨツテ」は、「ニヨリテ」に比べて口語性の強い形式と認めてよいであろうと、小林氏は述べていられる。以上の考察によつても、「原因・理由を表す条件句」という観点から三河物語の文体を考えると、文語体の要素が強いことが伺えるのである。又、会話文と地の文との区別では、(二)「アイダ」が会話文に特別に多く用いられている他、他のものもそれよりは低率ではあつても、平均して20%台は用いられていて、これらの文語体

「テ」であり、変体漢文体に用いられるものは(二)「アイダ」であり、和文体に用いられるものは(一)「バ」、(三)「ユエ」、(五)「ホドニ」および(七)「ニ」の四種である。右の六種は漢文訓読体・変体漢文体・和文体の違いはあつ

の条件句が会話文中にも現われている。従って、三河物語の会話文は純粹の口語体ではなく、地の文ほどではないにしても、文体体の要素が混じっており、会話文と地の文での文体的差異は少ないということになる。右に明らかにした点を、次には各条件句の上接語を調査することによって確かめてみよう。

まず、(一)「バ」の上接語については、動詞では敬語に関するものが多い。「候」は補助動詞としての用法が多い。(用例下の㊦は会話文、㊧は地の文)

○長親エ御ホウカウの筋目ハ、何れト申モ道前に候エバ、(36) ㊦

○御馬ガハナレテ人声高候エバ、父之大蔵ヲ御セイバイカト心得て、(69) ㊧

この「候」については、土井・森田『韃国語史要説』(昭50・3)に、前代(中古)筆者注からある「候」は、この期(中世)筆者注)にはいって、「侍り」に代わって丁寧語の動詞・補助動詞として盛んに使われた。しかし、末期の一般の口語には使われなくなり、もっぱら書簡の用語として固定した。(139頁)とあって、三河物語の時代には文語になっていた。

次に、「給ふ」も、本動詞・補助動詞とも盛んに用いられたのは院政時代頃までであって、それ以後は見られなくなる(中田祝夫『古語大辞典』)。

○源氏之ちやくく／＼にわたらせ給へバ、是にマシタル、ゾクシヤウナシ。(24) ㊧

○度々の高名、ナヲアラハシタル者供ヲモタセ給エバ、カレガ出、中々敵ヲアタリエ寄付事、思不レ寄ハタラキケレバ、(28) ㊧

次に、「申す」は「助ケ申サムズル」(延慶本平家、五本)のよう

に、謙讓の補助動詞として使われ、鎌倉期に栄えた。しかし、室町期にはあまり使われず、書簡の用語に固定した(国語史要説・139頁)とあるので、三河物語の時代には文語である。

○其帰りに勝頼ハ、あすけのくちへ御はたらき有と申せバ、上様ハあすけへ御陳立有(25) ㊧

○是寄ハ敵をあとにして、引のき申せば、先(づ)上様のかせられ給へ。(21) ㊦

次に、「御座アル」は室町期の形であって、近世は「ゴザル」が一般である。従って、三河物語の「御座アル」は文語となる。

○信忠卿は御ソウレウシキニテ御座アレバ、案祥ヲ讓セラレ給ふ。(37) ㊦

又、その丁寧体の「御座候」は「候」が付いている分、前の「候」の項に準じて考えるべきものであろう。即ち、三河物語の時代には書簡用語と考えられる。

○仰出シモ無御座候エバ。此方寄申上候エバ。帰而アヤマリ有に似リト存知。(68) ㊦

○何時もあのごとくに御座候らへバ。少身成。(243) ㊦

次に、「ヲハシマス」は、その類語「オハス」が中世以降に文語化する(古語大辞典)ことから考えると、これに準じて「オハシマス」も三河物語の時代には文語であったとしてよからう。

○次男に而ヲワシマセバ。内前殿ヲ御代に立申。信忠ヲバ肘に置申サント云人多シ。(36) ㊦

○只今之御主、廣忠ハ、御慈悲のフカク、御心安クアレ、(14) ㊦

次に、「マシマス」は、『日本国語大辞典』に次のようであって、漢文訓読語ということになる。

動 詞											品詞			
やきはらへ	御座 <small>ゴゾ</small>	申せ	フサガレ	給へ <small>(え)</small> <small>(エ)</small>	立 <small>(ツ)</small> レ	責取 <small>キミト</small>	候エ <small>(へ)</small> <small>(え)</small>	御座候え <small>(へ)</small>	御座アレ	ヲハシマセ	落行 <small>ヲミ</small> <small>(ケ)</small>	アレ	語例	用例数
1	1	5 (2)	1	44 (5)	1	1	65 (32)	9 (5)	1 (1)	6 (5)	1	6 (2)	合計	
142 (52)														

(一)「バ」の上接語(59例)(用例数の下の()内の数字は会話文での用例数。以下同)

形 容 詞											品詞		
ヨケレ	フカケレ	ナケレ	トヲケレ	ツヨケレ	ちかけれ	たかけれ	難 <small>ガ</small> ケレ	おそろしけれ	ヲソケレ	いとおしけれ	アツケレ <small>(厚)</small>	語例	用例数
1	2	17 (2)	1	2	1	1	3 (2)	1	1	1	1	合計	
32(4)													

助 動 詞											品詞
<small>(打消推量)</small> マシケレ	ベケレ <small>(推量)</small>	ヌレ <small>(完了)</small>	ナレ <small>(断定)</small>	ツレ <small>(完了)</small>	タレ <small>(完了)</small>	ネ <small>(打消)</small>	ザレ <small>(打消)</small>	ケレ <small>(過去)</small>	シカ <small>(過去)</small>	語例	用例数
11 (5)	3	1	163 (57)	1 (1)	15 (2)	8 (3)	33 (5)	166 (4)	4 (1)	合計	
405(78)											

助詞		動 詞				品詞
タル <small>(完了)</small>	シ <small>(過去)</small>	申	給ふ	スル	候う	語例
1	1	1 (1)	2	1 (1)	2	用例数
2		6(2)				合計

A(1)「連体形-故」型の上接語(8例)
(三)「故」の上接語(43例)(注)

助 動 詞					動 詞			品詞	
べき <small>(推量)</small>	つる <small>(完了)</small>	たる <small>(完了)</small>	ざる <small>(打消)</small>	ける <small>(過去)</small>	申	候	かうむる	有	語例
2	1 (1)	3 (2)	2 (1)	15 (1)	4 (4)	47 (38)	1 (1)	2 (1)	用例数
23(5)					54(44)			合計	

(二)「間」の上接語(77例)

『三河物語』の文体

助動詞		品詞
ける(過去)	去 <small>ザル</small> (打消)	語 例
1	1(1)	用例数
2(1)		合計

A(5)「連体形―故―ヲモッテ」型の上接語(2例)

助動詞	動詞	品詞
去(ざる)(打消)	給ふ	語 例
1	1	用例数
1	1	合計

A(3)「連体形―故―ニヨリテ」型の上接語(2例)

助動詞			動詞			品詞
タル(完了)	ザル(打消)	シ(過去)	申	スル	候う	語 例
7(3)	1(1)	1	1	1	1	用例数
9(4)			3			合計

A(2)「連体形―故―ニ」型の上接語(12例)

名詞	品詞
其	語 例
1(1)	用例数
1(1)	合計

C(2)「其―故―ハ」型の上接語(1例)

動詞	名詞	品詞
カル(カアル)ガ	方々の	語 例
2	1(1)	用例数
2	1(1)	合計

B(3)「ノ・ガ―故―ニ」型の上接語(3例)

名詞	品詞
七味 <small>シチミ</small> 起 <small>キ</small> セウ(七枚起請)	語 例
1(1)	用例数
1(1)	合計

B(2)「ノ―故―ナリ」型の上接語(1例)

助動詞	形容詞	動詞	品詞
タル(完了)	ツヨキ	武 <small>タケ</small> 給 <small>タマ</small> ふ	語 例
4(2)	1	1	用例数
4(2)	2	1	合計

A(6)「連体形―故―ナリ」型の上接語(7例)

名 詞								品詞			
ちなみ	御武邊	御普代 <small>(護)</small>	御じひ <small>(慈悲)</small>	御眼りき	口さき	御いきおひ <small>一つ</small>	御なさけ	御心 <small>一つ</small>	御カゲ	一言	語 例
1	1	1	1	1(1)	1(1)	1	1	1	1(1)	1(1)	用例数
19(8)										合計	

(四)「ヲモッテ」の上接語(19例)

名 詞				品詞	
我等	ちかづき	御手ガラ	御せうじき	御じひ	語 例
2(2)	1(1)	1(1)	1	2	用例数
7(4)				合計	

E(1)「体言―故―ニ」型の上接語(7例)

助動詞	動 詞					品詞	
ける(過去)	倍 <small>ツヨクナル</small>	のく(退)	環 <small>ツルミル</small>	切(きる)	きつてかゝる	云(いふ)	語 例
4	4	1(1)	1	1	2	2(2)	用例数
4	11(3)					合計	

(五)「程ニ」の上接語(15例)

故	何	二人之心	何	勅 <small>ツケ</small> 宣 <small>ノゾク</small>
2(1)	1	1	3(3)	1

(六)「ニヨッテ」の上接語(12例)

品詞	動 詞				名 詞		品詞	例	用例数	合計
	有	戒	給ふ	つよき	故	是				
ける(過去)										
	1	1	1	1	1	3	1	1	1	1
	2	1	1	1	1	3	1	1	1	1
	2	1	4	1	5	1	1	1	1	1

(七)「ニ」の上接語(1例)

品詞	語	例	用例数	合計
名詞	おそろしさ		1	1
			1	1

(注)「故」の上接語の分類は、拙稿「自筆本『三河物語』の「故」の読み方について」(未発表)の分類による。

次に、助動詞を見てみよう。助動詞は国語史的に消長のはげしい語であるが、ここに見られる助動詞の大部分は中世までで生命をとじたものである。即ち、キ、ケリ、ザリ、ツ、ヌ、ナリ、ベシ、マジなどである。「バ」が助動詞に下接する場合、大部分がこのよう

動詞「ます(坐)」を重ねたもの。「ます(坐)」よりも敬意が強く、中古では、神仏や皇族について用いられることが多い。また、和文体が「おわします」「おわす」を多用するのに対し、これは、漢文訓読体に用いられる傾向がある。

○廣忠の御座御座バ。逆成儀成。(83) 地

以上、「バ」の上接語の一つである動詞のうち、主として敬語動詞について検討して来たが、これらは全て三河物語の時代には文語であつて、このようなものに「バ」の大部分が付いていることは、「バ」自体が三河物語の時代には文語であつたことを物語っている。この結果は、先的小林論文で「バが、文章語的抄物の一つの中心的な表現形式であつた」(17頁)という指摘と一致している。

文語の助動詞についているということは、「バ」自体の文語性を示すものであろう。

○(キ)○文徳天王。御年三十にして御ほうぎよなりしかバ、第二之王子。御年九歳にて。御ユヅリヲウケ給ふ。(14) 地

○東三河之。牧野傳蔵ヲ打取。一國ヲカタメ給ヒシカバ。小田之彈正之忠に。セリトッメサセテ。(64) 地

○(ケリ)○其身者勿論思ひ定而有處へ。御使有ケレバ。如ニ存知ナレバ。驚に不及。(46) 地

○扱其後。岡崎ヲ取ント被成ケレバ。彈正左衛門尉殿モ。トテモ成間敷ト思召レ。(50) 地

○(ザリ)○内前、我等にモ、殊(ノ)外心ヲ置而、入番之者、ユダシノヤセザレバ、思ひ乍成(リ)難。(99) 地

○我ハ弟ナレ供、一度も別心ヲセザレバ、上座に可有(121) 地

○(ツ)○御身モ何トカ荒ト、不審に思ひツレバ、不思議に思ひ立給ふ事、返々モ喜敷存知候(99) 地

○(ヌ)○人目モ草モ。カレヌレバ。山里いとサビシキニ。(13) 地

○(ナリ)○我老人之事ナレバ、夕サリヲシラズ。(4) 地

○御代々久敷者ナレバ。イタツラに人ヲウシナハン寄。我(ガ)馬之先に而打死ヲサセ。(52) 地

○小河ハ内前殿、婿ナレバ。定而小河寄も。カ勢モヤ可有(66) 地

○(ベシ)○其家くにてかきおかるべけ(れ)バ。我々ハ。我が家之筋をくわしくかきおく成。(395) 地

○其きたをしたる物ならなくやミたるに。にべけれバ。かならずさたもせぬ事成。(413) 地

〔マジ〕○此儀ヲ聞不申ハ、後之恨限有間敷ケレバ、御身計に聞

セ申成、(94) ㊤

○我が市名又ハ我身之事をか、すハ子共之かつてんもすミ申間敷けれバ、如此に候、(230) ㊤

以上、上接語の検討からも、「バ」は文語的な条件句であるといえよう。

次に、(二)「間」の上接語を検討する。まず動詞では、(一)「バ」同様に、「候」「申」などの文語に下接し、特に「候」への下接が多く、「間」が変体漢文体の用語であることを物語っている。

〔候〕○兄に而候人ハ、少(シ)御用御座候間、御隙入候ハズハ、少度御出アレ、(94) ㊤

○某目懸申たる者之儀にて御座候間、哀某に御あづけ給候へ

(247) ㊤

〔申〕○我等計ヲ。フカクウタガイ申間。久敷。ノブルナラバ。何タル事ヲカ申ベシ。(87) ㊤

○越前衆罷出申間、合戦ヲ可被成(211) ㊤

三河物語の文体の一つとして変体漢文体の要素が存することは、この「間」の接続助詞的用法のみでなく、接続詞「然ル間」の用例によって証される。三河物語には、この「然ル間」という変体漢文の用語が全部で一〇八例みられる。(この中、会話文中の例は二二)

○然る間。松平之郷中ヲ出させ給ひ而。岩津に城ヲ取せ給ひ而。

御意城トシテ。スマセ給ふ。(24) ㊤

○然る間。早(ヤ)御一門之衆も。我々に成而。シタガイ給ふカタモ。ヲワシマサズ。(36) ㊤

○然(ル)間。一足サラズ。戈カハセ給ふ所に。良且。戈給ふが。多之疵ヲカウムリ。場モサラズシテ。主ジウ拾二三人打死ヲシ

給ふ。(55) ㊤

○然(る)間。此度ハ、我等ヲバ、重(ネ)而のタメにタバイ給エ。(99) ㊤

○然(る)間、御別心ナト、申儀ハ、夢々思ひモ寄ズ、(125) ㊤
次に、助動詞についても、(一)「バ」同様に、ケル、ザル、タル、ツル、ベキなどの中世までの文語に下接しており、「間」自体が文語であることを証している。

〔ケル〕○我先にと出ける間。案の内成とて。我モくと乱入。(25) ㊤

○御内之れきくハ。おふかたにげける間。申ぞこなひにハあらず。(373) ㊤

〔ザル〕其儀にあらざれば。我等のぼり申事ならざる間。偏に頼入

(328) ㊤

○早(ヤ)ならざる間。こみ孫七郎が人にすぐれてはしり出。(312) ㊤

〔タル〕○し場ヲ取タル間。此方之勝(カチ)未(だ)ゑじり之城をもちていたる間。此城々をおさめて。(284) ㊤

cf. 新九郎ヲ初(ハジメ)所勢供モ。モテアツカイタフセイ成。(29) ㊤

〔ツル〕○只今迄ハ昔之てっほう之者共が有つる間。よく心得而人之云事おもき、候らへバ。(311) ㊤

〔ベキ〕○我々代々の御ちうせつがむと可成間。其儀をむなしくなすまじきため。(413) ㊤

○主のばちも。おやつのはつもあたらぬと見べき間。是をおもへバ。左様に申人ハ。御主様之御事おも思ひ申まじきハ。ひつぢやう成。(414) ㊤

次に、(三)「故」の上接語は、まず自筆本三河物語の「故」字は「ウへ」と読むべき場合があつて、以下はこれらを除いて、「ユエ」と読むものに限って取り上げる。A(1)「連体形―故」型の上接語の場合、動詞は「候」「給」「申」などの文語に下接している。

〔候〕○吉田河エヲヒハメ候故。清康ト。内前跡寄懸ラセ給エバ。

(61) ㊦

○同(じ)ごとくに候う故。さてはさゝゑ申たるか。(423) ㊦

〔給〕○御武邊武渡セ給ふ故。「シホ。御慈悲ヲ被成。御哀み。御情ヲ懸サセ給ひ而。(52) ㊦

○義元ヲバ打取給ふ故、其奇無レ。儼、物ナラバ、(214) ㊦

〔申〕○七昧キセウヲ三度書セ申故、ユダンヲシテ扶置申事、悔敷口惜無念成、(108) ㊦

又、助動詞はシ、タルなどの文語に下接しており、やはり「故」自体が文語であることを示している。

〔シ〕○今明日野儀も不存候らへシ故。于今にもむなしく罷成候ら

ハ。(424) ㊦

〔タル〕○軍兵供。早セイキが。キレテ。何トシテモ。ツカレタル故。其ヲ引ノケ。八萩河ヲ前にアテ、御旗ヲ立給ふ。(34) ㊦

A(2)「連体形―故―ニ」型の上接語にも、動詞は「候」「申」、助動詞はシ、ザル、タルなどの文語が用いられていて、「故」自体の文語性を示しているよう。

〔候〕○能御普代ヲモタセラレ候う故に。ツ、ガナク。取廣サセ給ひ而。(27) ㊦

〔申〕○某も。殊(の)外せき申故に。(中略)と申上たる儀ハ。心

之外の儀成。(374) ㊦

〔シ〕○陳屋エクトツロゲシ故に。ゐ合ズシテ。(70) ㊦

〔ザル〕○火をかけざる故に。城寄したいて出る。(311) ㊦

〔タル〕○普代之者ヲ持タル故に。日本國がウゴキヲ。拾万廿万騎に而。倚供。(47) ㊦

○御身に昔目を懸申たる故にあづかりて。らくにおき申成。(247) ㊦

A(3)「連体形―故―ニヨリテ」型の上接語も「給ふ」「去(ざる)」などの文語である。

〔給〕○仁田之内。徳河之郷中におハしまし給ふ故に寄而。徳河殿と奉申キ。(17) ㊦

〔去(ざる)〕○心に慈悲ヲモタ去故に仍、打死の場に而、生取レ而、腹ヲ切タル儀ハ、(154) ㊦

A(5)「連体形―故―ヲモツテ」型の上接語も「去」「ケル」などの文語である。

〔去〕○其故我等ト、カ去故ヲモツテ、人迄ソコナフトイハレン事モ迷惑、(113) ㊦

〔ケル〕○口もんどろをしたりける故をもつて。坂井左衛門督殿ハ。

(中略)と被申候う。(295) ㊦

A(6)「連体形―故―ナリ」型の上接語も「給ふ」「タル」などの文語、および形容詞の「タケキ」「ツヨキ」などの非音便形を用いている点も文語性を示している。

〔給〕○御普代ヲ持せ給ふ故成。(53) ㊦

〔タル〕○五百二百に而モ。戮而懸ント思ひシハ。カレラヲ持タル故成。(47) ㊦

○我等がからかい申たる故成。(407) ㊦

〔タケキ〕○是ト申モ。第一御武邊。武故成。(53) ㊦

〔ツヨキ〕○是モ上様之御雲のツヨキ故成。(188) ㊦

以上のように、A「連体形―故」型では、上接語の観点からも「故」自体が文語であることは明かである。

次に、B(2)「ノ―故―ナリ」型の上接語は名詞(「七枚起請」)で、特に文体とはかかわらない。

○七昧シモイキセウノ故ナレバ。サナガラ詞コトバにハ不レ被レ出、(93)㊦

次に、B(3)「ノ・ガ―故―ニ」型の上接語も「ノ」の場合は、名詞(「方々」)で文体とはかかわらない。

○方々の故カタカタノコトに有(リ)つるぞ(232)㊦

しかし、「ガ」の場合は、「カルガユエニ」という一語の接続詞とも見られ、これについては、『古語大辞典』に、

古くは漢文訓読の語で、和文では、「されば」などを用いる。類聚名義抄では、「為」「故」「肆」にカルガユヘニの訓を施している。中世以後は和文にもみえてくるが、日葡辞書に文書語と注されているように、改まった感じの文章語として用いられた。

とあって、三河物語の時代に、「カルガユエニ」が文章語であったことが明らかである。

○故コト。當トウ大宗文皇帝タウシウウヱンテイハ。疵キズヲすい。戦士セシシをしやうじ。(6)㊦

○かるが故カルガコトに。慶長八年ケイチャウハツト。五月五日に京とを御出馬被成而。

(348) ㊦

次に、C(2)「其―故―ハ」型の上接語は、特に文体とはかかわらない。

○其故コトハ。軍イクサの習者シライシラレス。此上コノ上若味方打負ワカマトラバ。城迄マダトラルベシ。(80)㊦

終りに、E(1)「体言―故―ニ」型の上接語は体言であるが、特に

文体とはかかわらない。

○相國御サウクニミコじひ故。四度迄ハ御ゆるされ被成レけれ共。(352)㊦

○相國様御サウクニサマミコじひにて。御せうじき故コトに。天道之御目テウダウノミメぐミふかくして不被参。(416)㊦

○家康之御手イカサネノミテガラ故。天下之ホマレヲ取(214)㊦

以上、「故」の上接語についても、文体とかかわって文語か口語かという観点からみると、殆ど全て文語であって、「故」自体の文語たることを示している。

次に、(四)「ヲモツテ」の上接語は表の通り全て名詞であって、特に文体とはかかわらない。

○人は一言ヒトコトをもつて。其賢愚ケイイをしる(383)㊦

○家康之御イカサネノミコいきおひ一つをもつて。即程ソレバなくのり付ける。(308)㊦

○左衛門督殿サエモンツクサマ口さきをもつて。二度敵になしたる(295)㊦

次に、(五)「程ニ」の上接語は、動詞では特に文体とはかかわらないが、助動詞では「ケル」という文語に下接している。従って、「程ニ」自体も文語ということになる。

○きつてかかる程キツテカカルマサに。早ハヤ一二之手ヒトニノテをきりくづしければ。(236)㊦

○水の手ミヅノテをとるつるべなハを切キほどに。ならずして城をわたす。(234)㊦

○のこぎりを取かへくひきけるほどに。一日之内に引ころす。(262)㊦

○我おとらじとかけける程ワガオトラジトカケケルマサに。かにへと申ハ。しほ之さし引シホノサシヒキきの處トコロなれば。(308)㊦

次に、(六)「ニヨツテ」の上接語は、名詞に関しては、「故」が文語であることは右に述べた通りである。

○心に慈悲ヲモタ去故に仍、打死の場に而、生取レ而、(154) ④
 又、動詞では「給ふ」が文語、形容詞では「つよき」という非音
 便形が文語である。

○徳河泰親と被下給ふに仍。早國中^{ハヤ}之侍も。たみ。百將^{ヒヤクザウ}にいた
 る迄も。ヲソレヲナサバル者ハナシ。(24) ④

○御うんのつよきによつて。御ぜん之出る時。御しきだひを被成
 而。(331) ④

又、助動詞では「ケル」が文語である。

○早ク押コミテ有り、更バ早之助ト付ヨト被仰ケルに仍、榊原、
 早之助ト申成、(170) ④

○信長之仰にハ、(中略)と仰けるによつて。さかいへ御越被成け
 る。(287) ④

この「ニヨツテ」は「ニヨリテ」に比べて口語的性格のものと、
 小林論文にはされているが、三河物語では、むしろ文語に下接して
 いて、上接語文語、条件句口語というアンバランスになっている。
 文語体の中に口語が混じった形になっている。

次に、(七)「ニ」の上接語は体言であつて、特に文体とはかかわら
 ない。

○其(一)くるしみのおそろしさに。御主と。親おバ大事にして。
 (414) ④

以上、条件句にどのような語が上接しているかを調べたが、(六)「ニ
 ヲツテ」以外は全て、文体にかかわる上接語の場合は文語であり、
 それに合致するような文語体の条件句が用いられているといえよ
 う。(六)「ニヨツテ」のみは、上接語文語、条件句「ニヨツテ」は口
 語的性格のものというように合致していない形になっている。従つ
 て、上接語の調査からも(六)「ニヨツテ」以外の条件句は全て文語で

あるといつて矛盾はない。

二、指定の助動詞

本節では、指定の助動詞にどのようなものが用いられているか
 よつて、三河物語の文体を考えてみたい。

三河物語にみられる指定の助動詞としては、「ナリ」「候」「ゾ」「御
 座アル」「御座候」「ダ」の六種がみられる。夫々の用例数および会
 話文、地の文での用例数を調べると、「第一表」のようになる。

〔第一表〕指定の助動詞の用例数

	ナリ	候	ゾ	御座アル	御座候	ダ	合計
会話文	362 (44.8)	368 (45.5)	26 (3.2)	10 (1.2)	41 (5.1)	1 (0.1)	808 (99.9)
地の文	336 (66.4)	171 (31.0)	3 (0.5)	3 (0.5)	8 (1.5)	0 (-)	551 (99.9)
合計	728 (53.6)	539 (39.7)	29 (2.1)	13 (1.0)	49 (3.6)	1 (0.1)	1359 (100.1)

(注) () 内の数字は百分率。以下同。

この表によると、前節の条件句の上接語でも検討したように、ま
 ず、文語が大部分であること
 が注意される。即ち、「ナリ」
 は上古以来の指定の助動詞
 で、三河物語の時代は文章語
 であり、「候」は鎌倉時代以来
 の語で、当時は文章語である。
 この「ナリ」とその丁寧語の
 「候」とで、会話文は九〇・
 二%を占め、又、地の文は九
 七・六%を占めている。全体
 としても九三・三%を占めて
 いる。

〔ナリ〕○代々に。戮取く
 スル物ナラバ。先給代之

内ニハ。カナラズ。天下
 ヲオサメ。(20) ④

○我等モ、我一類の事ヲ、

如此書而、子供に渡、夢々門外不出可有成、(4) (地)
 「候」○其儀ハ菟モ角モ。其儀にカマイ不申候。(20) (会)
 ○山中ヲ。先(づ)切取セ給故に。山中ヲモ御本領とは被仰候成。
 (50) (地)

指定の助動詞は多く文末に用いられ、文体をはかる尺度に使われることがあるが、この「ナリ」と「候」という指定の助動詞で九割以上が占められているということは、とりもなおさず三河物語の文体基調が文語体であることを物語っているといえよう。右の「ナリ」「候」以外のものとしては、「御座アル」「御座候」「ゾ」「ダ」の四語が僅かながら見られる。

「御座アル」○舛取ヲ申付而置申物ナラバ。我等之スギアイホド之儀者御座可有。別之菴モ御座無(49) (会)
 ○清康何心モ無シテ御座有處ヲ。ヒンヌイテ切害申。(69) (地)
 「御座候」○御意無供。見懸申(サ)バラリ可申處に。畏御座候(45) (会)

○御主ハ何クニ、御座候供、普代之御主様之の御奉公ナレバ、(156) (地)
 「ゾ」○尾張ハ今にいたって。何方へおちゆくぞ(286) (会)
 ○か様之けだ物だにぶんにしたがう心ハ有ぞとよ。(424) (地)
 「ダ」○若(し)も御臺といわれ、バ。しうげんだが。いわれぬ時のぶしうげんハの。(260) (会)

しかし、前二者は室町時代語であって、三河物語の時代には既に文章語化していたであろう。すると、後二者のみが当時の口語ということになる。「第一表」によると、「ゾ」は会話文で主として用いられ、この語が口語であったことを示している。三河物語では、同じ会話文の中でも、目上に対して丁寧に表現する時は「候」を用い、

同輩又は目下に対してぞんざいに表現する時は「ゾ」を用いるというように、使い分けが見られる。又、「ダ」は、東国語の特色を示す語であるが、三河物語では、前掲の会話文での用例が一例みられるだけである。妻が夫に言っていることばであり、しかも、夫を非難している所に用いられていて、ぞんざいな言い方又は、常体的な表現の語だったのである。

以上からも、期待された東国語の「ダ」は僅かの一例に過ぎず、室町時代語の特色を示す「御座アル」「御座候」の用例も少なく、大部分は奈良、平安、鎌倉時代以来の伝統的な語の「ナリ」「候」であって、これが三河物語の基本をなしていることがわかる。なお、「ゾ」はぞんざいな指定に変質しているといえる。

以上、指定の助動詞からみても、三河物語の文体が文語体を基調としていることがわかり、それに口語(俗語)が一部混入している程度ということになろう。

三、その他の助詞・助動詞

前節の調査によつて、指定の助動詞の場合、「ナリ」「候」の文語が始であつて、三河物語の文体基調が文語体であることが明らかになった。これと同じような傾向のものとして、三河物語には「うず」がなく、「ントス」「ンズ」のみであることが挙げられる。室町末期の口語「うず」はギリシタン資料に用例が多いが、この「うず」については、『古語大辞典』に次のようにある。

助動詞「う」が「む」から成立したと同様な過程を経て、助動詞「むず」から成立したもの。室町時代に「う」と共に多用され、江戸時代に入って急激に勢力を失ひ消滅する(一部方言に「ず」として残る)。終止形・連体形は、「うず」「うずる」の併

用が長く、消滅直前まで続く。その推移については断定しがた
い点がお多い。(下略)

三河物語に「うず」(室町末の口語)がなく、「ントス」「ンズ」の
みであることは、やはり三河物語の文体の文語性を示すものであ
う。まず、「ムトス」の用例は次の四例である。

○傳藏モ塘^{ツギミ}エ押^{アゲシ}上^{アゲシ}ントス。(59) ^地

○小豆坂えアガラントスル處に而、鼻合^{ハナ}ヲシテ、互^{タガ}に、洞^{ぶつ}天^{てん}シケ

り、⁽¹³⁷⁾ ^地

○婦^返リチヤウギヲシテ、信長ヲ打^ヒセントス、⁽²¹⁵⁾ ^地

○二三本にて平助がやりをからみてなげれば。なおしてつかん
とする間に打とおる。⁽³¹⁵⁾ ^地

「ムズ」の用例は次の二例である。

○其儘押ツメ給ハ、駿河迄モ取給ハンズレ供、信長ハ、ツヨミ
ヲ^押サセラレ給去^{ザル}人ナレバ、⁽¹⁶⁵⁾ ^地

○三郎が命さへながらへバ。汝が命をももらはんずれ供。左衛門
督がさ、への故ハ。何としても成間敷に。⁽²⁷³⁾ ^会

「ムズ」より更に古い形の「ムトス」の方が優勢であつて、ます
く文語性を高めている。なお、「ムトス」の四例は全て地の文にあ
り、「ムズ」は一例が会話文、一例が地の文に用いられている。

右の「ムトス」「ムズ」は三河物語の文体が文語体であることを示
すものであるが、これに対して、逆に、口語体の要素を示すものが
ある。即ち、三河物語には、自己の希望をあらわす「マホシ」はな
く「タシ」のみが用いられている。用例は全部で十三例みられる。

○早^(ヤ)タベ度ト。心得^{イキ}而^{イキ}急^{イキ}ケレバ⁽⁹¹⁾ ^地

○早^(ク)承^(リ)度^(ク)候⁽⁹⁵⁾ ^会

○其酒ヲ、早^(ク)被^(リ)下^(度)度⁽⁹⁵⁾ ^会

○新八殿⁽²⁾、能酒ヲ早^(ク)聞^(申)申度^(候)候⁽⁹⁶⁾ ^会

○早^(ク)被^(下)下度^(シ)度⁽⁹⁶⁾ ^会

○御物語申度候⁽¹⁰²⁾ ^会

○甚太郎殿者、廣忠ヲ引^{ツケ}請^{ツケ}度ト被^(成)成候^(工)供、⁽¹²⁰⁾ ^地

○後日にハ、岡崎え、ノキ度ト申^(タ)タリ^(供)供⁽¹²⁷⁾ ^会

○トテモノハシリメグリヲ、御目之前に而申度⁽¹⁶⁸⁾ ^会

○此故にてモ國へも行^(度)度ハ行^(給)給へ。⁽²⁴⁷⁾ ^会

○行^(き)度ハ行^(給)給へ⁽²⁴⁷⁾ ^会

○さやう成事をいまくわ敷。き、度もなし⁽²⁵⁸⁾ ^会

○我等二人之どうぐを、しり度共しらせ間敷⁽³⁵⁷⁾ ^会

右のうち、会話文中にみられるものが十一例、地の文中にみられ
るものがわずかの二例である。従つて、「タシ」は主として会話文中
に用いられているといえよう。「まほし」は平安時代に成立したが、
鎌倉期にはすでに衰えていて、これに代つて「たし」があらわれた
とされている(国語史要説・119頁)。三河物語に「まほし」がみられ
ないことは、少なくともこの点に関しては、口語体によつてい
いえよう。但し、用例は全て「度」と漢字表記であつて、終止・連
体形が「タイ」とイ音便になつていたか不明で、もし「タシ」「タキ」
とすると、当時としては文章語となる。

右の「ムトス」「ムズ」で文語体的要素を、「タシ」で口語体的要
素を見て来たが、次には、同じ文語体的要素ではありながら、時代
による変化を受けて、文語体のくずれかけた例を挙げてみよう。そ
れは係結びの現象で、「コソ」の結びについてである。三河物語では、
「コソ」の結びは次のようになつてゐる。

〔第一表〕「コソ」の結びの形

コソ	已然形	終止形	連体形	消去例	合計
27 (39.1)					
26 (37.7)					
8 (11.6)					
8 (11.6)					
69 (100.0)					

これによると、「コソ」の結びは、法則通り已然形で結んでいるものは四〇%にもみならず、他の六〇%強は已然形以外の終止形(三七・七%)、連体形(二一・六%)、消去例(二一・六%)となつてゐる。つまり、「コソ」の結びを已然形にするという文語的要素は弱まっていることになる。

〔コソ―已然形〕

○御馬之先に而。戮死に仕而。シテ。三つ之御供社。弓矢ヲ取而の面目ニテ候エ。(30) ㊦

○ハシリメクリ之者供にハ。情ヲモ懸給而。我等が様にも。立様にと被成候て給り而社者。本意ナレ。(48) ㊦

〔コソ―終止形〕

○其儀ナラバ。泰親御供アレと被仰而。御供ヲ社被成けり。(24) ㊦

㊦ 有合(セ)ヌ事社天道にハナサレタリ。(71) ㊦

〔コソ―連体形〕

○新九郎社、へり道ヲシテ打(た)レタル(189) ㊦

○家康こそ女房をがいで腹を切たると有(る)ならバ、(330) ㊦

〔コソ―消去〕

○ネテモサメテモ。是ヲ社思ひ暮申セシに。カ様に人に定ヲイタサル、モ。天道之ツキハテタル事成。(67) ㊦

○義元社打死ナレバ、明日ハ信長、其元え押寄可被成、(166) ㊦

三河物語が文語体を基調としながら、このような破格が見られることは注意すべきである。「コソ」の已然形結びが四〇%以下というのは、近世初期の文語文の一つの実態であろう。

おわりに

以上、三河物語の文体の特徴を、

一、条件句

二、指定の助動詞

三、その他の助詞・助動詞(ムトス・ムズ、タシ、コソの結び)の三点から検討してきた。これははじめにも述べたように、文体を語彙・語法の観点からとらえたものである。その結果、三河物語の文体は文語体を基調としてゐるということが明らかになつたが、一部、口語的要素をも含んでゐることは前述の通りである。

おわりに、右のように語彙・語法から文体をみるのではなく、記載形式から文体をみることも試みてみたい。即ち、格助詞「ヲ」の仮名遣いの観点からである。

まず、三河物語の文体を、その記載形式から大きく分けると、上中巻は漢字片仮名交じり文、下巻は漢字平仮名交り文ということになる。このような文体上の違いの立って、格助詞「ヲ」の仮名遣いがどのような状態になつてゐるかを調べると、次のようになる。

まず、格助詞「ヲ」が平仮名で「お」と書かれてゐるものを、上中巻と下巻とに分けて、その出現数を調べると〔第一表〕のようになる。これは、格助詞「ヲ」を「お」と単独に表記してゐるもの、「お」の下に「さへ」「ぞ」「と」「バ」「も」などの助詞が付いたものに分けて用例数を調べたものである。

この〔第一表〕によると、「お」の用法は単独で用いられるよりも、

〔第一表〕「お」の用法

合計	おも	おバ	おと	おぞ	おさへ	お	
17 (100.0)	1 (5.9)	9 (52.9)	0 (—)	1 (5.9)	0 (—)	6 (35.3)	上
	11 (64.7)					6 (35.3)	中巻
175 (100.1)	53 (30.3)	96 (54.9)	1 (0.6)	1 (0.6)	2 (1.1)	22 (12.6)	下
	153 (87.4)					22 (12.6)	巻
192 (99.9)	54 (28.1)	105 (54.7)	1 (0.5)	2 (1.0)	2 (1.0)	28 (14.6)	合
	164 (85.4)					28 (14.6)	計

「バ」「も」などの助詞を伴って用いられる場合の方が多いようである。

〔お〕 ○おほくの星霜お送り給ふ (6)

○二人の御子お引グシ奉り。

右近之馬場エ行幸成。(8)

〔お—さへ〕

○こまき山にハさくおさへ付させ給はずし

て。かけはなちに陳取らせ給ふ。(304)

○御譜代衆おさへ召寄(せ)させられておかせられ給ハ。萬に御きづかいハ有まじけれ共。(390)

〔お—ぞ〕

○西塔ヒヤウトウ坊にて。大イトクノ法おぞおこなひ給ひける。

(9)

○城中にもはやひやうらう米も候ハねバ。はやかうさんおぞ申ける。(241)

〔お—と〕

○今思ひ合(ひ)候らへバ。是等ほどよき高名ハ有間敷物おと。平助も若げ之いたりにて打せず。(316)

〔お—バ〕

○セバキ道おバ。ひろげ。出たる意思おば。ほり捨。橋ヲ懸。道ヲツクリ。(19)

○おぎの城おバ。次男源次郎殿に御ゆづり有。(25)

○三郎おバ。左衛門督がさゝゑによつて。腹をきらす迄。(272)

〔お—も〕

○我等供が。か様ニ申おも。信忠者。何供思召者。有間敷けれ供。

(40)

○何事おも。某之いたづらに被成候らへて。某が頸をとらせ給ひて。

(272)

○一騎共此由聞寄も。四方寄押寄而。河しりおも打ころす。

(290)

ところで、上中巻は片仮名表記を主体とし、初めの部分(三河物語^{第二上}の四〇頁まで)のみに「お」の例がみられ、他は主として「ヲ」が用いられている。「お」の単独用法が三五・三%見られ、下巻の場合に比べて高いが、用例自体が少ないので、はっきりしたことはわからない。これに対して、下巻は用例も多く、単独用法は二一・六%と低率となり、「お」が他の助詞を伴う用法が断然多い。この点からも、三河物語での「お」の用例は単独用法でみられるよりも、主として、他の助詞を伴う時に用いられていると考えてよさそうである。尤も、これは主として平仮名漢字交り文での用法であって、片仮名漢字交り文では、いかなる場合も「ヲ」を用いていることはいうまでもない。片仮名交り文では、「ヲ」のみで「オ」は用いられていない。一見複雑そうに見える「お」「を」「ヲ」の仮名遣にも、一定の

傾向が存するようである。即ち、原則的に、片仮名交り文では「ヲ」、平仮名交り文では「を」を主として用いるが、他の助詞を伴う場合には「お」を用いるということである。右の「お」以外の「ヲ」「を」の用例数は、上中巻と下巻において、「第二表」のようになっている。

〔第二表〕「ヲ」「を」の用例数

	を	ヲ	上中巻	下巻	合計
合計	1469 (100.0)	1425 (97.0)	44 (3.0)	12 (0.8)	2883 (100.0)
	1446 (50.2)	1437 (49.8)	1402 (99.2)	2883 (100.0)	

上中巻は前述のように、片仮名交り文であるから、「ヲ」が九七・〇％と断然多く、下巻は平仮名交り文であるから、逆に「を」が九九・二％となっている。そして、主として、下巻において、「を」と「お」に右に述べたような使い分けが見られるということになる。

〔ヲ〕○此書物ヲ、クガイエ出ス者ナラバ、御普代衆、忠節之筋目、又ハ、ハシリメグリノ事ヲモ、能(ク)、センサクシテ、可レ書ガ、是者我子供に、我筋ヲシラセントメニ、書置事ナレバ、(4)

○弓矢ヲ取セ給ふ事。并者無。(24)

○本能寺へ押寄而。信長に御腹ヲさせ申。(288)

○其外にもあれ共。まづ彼等が事を云たり。(277)

○先ちまつりに。ぎふの城を責取ける。(338)

上中巻は片仮名交り文、下巻は平仮名交り文という大わくの中にあって、以上に述べたような「お」「を」「ヲ」の書き分けの存することを述べたのである。

ある作品の文体をきめる要素は多種多様である。本稿は、語彙・

語法の観点を主として調査し、それに、表記の面からの調査を加えて、三河物語の文体について考えてみた。はじめにも述べたように、まだ調査の途中であって、今後更に取り上げるべき問題は多い。

(平成五年七月二十日受理)